

哲学的意味論における文脈主義と相対主義

——不一致の取り扱いをめぐって

鈴木 慧 (本学社会学研究科修士課程)

近年の哲学的意味論では、何らかの主観的規準を参照してその指示を変えるように見える言語表現 (e.g. 「この飴は美味しい」のような、参照される趣味基準に応じて真理値を変えるように見える趣味的定文) の意味論的取り扱いについて、文脈主義と相対主義の間に論争が展開されている。文脈主義と相対主義は、いずれも Kaplan 的な意味論の枠組みを前提した上で、主観的規準を参照して指示を変化させるように見える言語表現に対して、それぞれ次のような意味論的取扱いを提案する：(a) 文脈主義は、問題とされる種類の言語表現の指示の可変性を、発話文脈への内容の依存によって説明する。すなわち、内容が文脈変化に反応して変化することを通して、指示も変化する、とする。これに対して、(b) 相対主義は、同種の言語表現の指示の可変性を、評価状況への指示の依存によって説明する。この相対主義は、言語表現が発話文脈貫通的に不変の内容を保持し、その上でその不変の内容が評価状況内の諸パラメータの値に応じて様々に指示を変えるとする点で文脈主義と異なる。このように、文脈主義と相対主義とは、同一種類のデータを説明する上での競合する説明方針となっている。

この論争の中で、不一致 (disagreement) は、文脈主義を批判する論脈で相対主義者によってしばしば引き合いに出される現象である。文脈主義的意味論は「この飴は美味しい」「いや、この飴は美味しくない」という談話を「この飴は私の趣味基準に合う」「いや、この飴は私の趣味基準には合わない」という談話と意味論的に等価と見なす。だが、相対主義者である Kölbel や Lasersohn によれば、文脈主義はその結果として、明白に不一致を来しているように思われる談話をも不一致ではないものとして取り扱わざるをえない。それゆえ、Kölbel らに言わせれば、文脈主義は少なくとも幾種類かの言説への適用に際して相対主義に見劣りする。

Kölbel らのこの議論に対しては、すでに次のような反論が案出されている。すなわち、Kölbel らの議論は、正確には《不一致についての Kölbel 流の分析に従えば、文脈主義は直観的に不一致であるように見える談話を、意味論的には不一致でないものと説明せざるをえない》というものであって、この議論は文脈主義の側からするならば、文脈主義を棄て去らずとも、不一致についての非 Kölbel 流の分析を与えることによっても回避可能である、という反論である。

本発表では、以上を踏まえ、(i) 不一致にまつわる言語データは、それ自体として文脈主義への批判材料であるというよりも、むしろ不一致現象の分析次第で多様に分析されうるものであるという上記反論を擁護した上で、(ii) 相対主義の穏健なバージョンが、意見の収束が強く期待される類の言説 (道徳的言説など) における不一致の取り扱いに関して有望である、ということ論じる。